全力疾走

四谷イツキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
全力疾走

【Ｎコード】
Ｎ２８７３Ｉ

【作者名】
四谷イツキ

【あらすじ】
高校生の巽（タツミ）には、暢志（ヨウジ）という親友と体の弱い弟・連（レン）がいた。
二人とも、かけがえのない存在。
しかし、その二人を失った後に彼を待ち構えていた事故。
世界の全てが絶望に見えた時、巽は何を思うのか。

序章　【助走】（前書き）

高校生の時、授業の課題で書いたとは思えないくらい人が死にます。
何を考えてたんだ、と呆れるくらい無茶ぶり。
とにかく、速度を出したかった。
タイトルの通り、全力疾走なお話です。

序章　【助走】

・・・最後くらい、静かに出来ないものだろうか。

僕は、喧騒の巻き起こるこの狭い箱の中で、ただ目の前に与えられた現実だけを抜き取って眺めた。
人間という与えられた生物にとどまり、僕は僕として生きるしかなかった、
それが義務であり、それを遂行してやっと、喜びや悲しみなどをの感情を求める権利を得られる。
人間はみな、何かに導かれて生きているのではないだろうか。
こうして生を求める争いの中で、人間は本能というレールに支配されている。
僕もそれを傍観するに当たって、何かに支配されているのだろう。
だとすれば、何だ？
現実感のない現実に対する疲れと、あまりに現実感の溢れた現実への恐怖だろうか。

それは利己心にしか過ぎない。
僕は、僕という人間を理性的であると飾っている。
この状況下で何を言ってももう無駄だ。
僕が本当に純粋な人間であろうが、貪欲な人間だろうがもう何も関係ない。

「坊主、どけ！」
頭部に衝撃を受け、青い布で覆われた椅子の上に横になる。
頭がズキズキと痛んだ。
僕のもと居た場所では、背広を着た中年の男性が一生懸命に窓を叩

いている。
「・・・割れないよ」
僕が横に倒れたまま言った。口に鉄の味がする。
この男に突き飛ばされた際に、こめかみを切ったらしい。
一筋の血液が頬を伝おうとしていた。
「もうどうにもならないんだ、静かにしてなよ」
僕の冷めた瞳を覗きこんで、彼は叫び声をあげた。

・・・狂気。

荒れ切った車内に、彼の激しい声が木霊する。
僕はそれをどこか優越感に浸りながら眺めていた。
全てを悟っていると、自分で過信していたのかもしれない。

――――自分の求めていた、狂気の世界。

失踪　【疾走】　1

「これがいいんじゃねぇ？」
手に取ったブレスレットを元の場所に戻しながら暢志を見た。
僕は彼の手の内にあるものを見て、思わず苦笑を浮かべる。
何だよ、と言わんばかりに暢志は怪訝な顔をして僕を睨む。
「僕も同じの見てた」
さっきまで手に取っていた皮のブレスレットを暢志に示す。
暢志は茶色の物を、僕は黒のものを手に取っていた。
「お前と趣味が合うのもなぁ・・・嬉しいやら悲しいやらだ」
「失敬なやつだな」
僕はくるりと身を翻してレジに向った。
その後ろを暢志がついてくるのが分かる。

僕と暢志が出会ったのも、何か運命の歯車が壊れたせいなのだろう。
きっとそれが正常に作動していたなら、僕はこんな悪ガキみたいな男とは関係を持たなかった。
僕とは全く正反対の人間だ。
「ってぇな、あにすんだよ！」
後ろについてきているはずの暢志が怒鳴った。
僕は素知らぬ顔をしてレジに並び、前の客が終わるのを待つ。
彼は特に気が短いわけでもないのだが、若気の至りとでも言おうか、何にでも突っかかる。
後ろでは少しの取っ組み合いが起こりそうな気配だったが、相手が謝るか折れたかしたのだろう。
暢志は何もなかったかのように僕の後ろに並んだ。
「あんにゃろ・・・なぁ見たか？巽」
店員の女の子からおつりを受け取って、暢志へと順番を回す。
「聞いてたよ。暢志君はいつになったら成長するんだよ」

「いや、だってよぅ・・・」
暢志はモゴモゴと口を詰まらせながら会計を済ませた。

彼は誰の前でも強気でいる男だ。
言い換えれば、何に対しても自信を持っている。
この一年で悟った彼の性格としては、友好的で社交的、誰とでもすぐに意気投合するのがうまい。
僕なんかの数倍は携帯のメモリーが多いだろう。
そして僕よりもはるかに感情の起伏が激しかった。
こうして肩がぶつかっただけでも喧嘩腰になるし、ときには電信柱に喧嘩を売っていたこともあった。
いつでも負の表情を見せたことがない。
僕はそんな彼を見ているだけでも充分に面白かった。

前に一度、暢志に出会う前につるんでいた友達に言われたことがあった。
『どうしてあんな輩と付き合ってるんだ?』
僕の中での友達は、暢志だけというわけではないし、そう言った彼のことも友達としてみていた。
それでも彼は僕に会うたびに目を反らす。
廊下ですれ違うたびに僕を避ける。
僕もそれが彼のどんな理由から来ているのかは、分かっている。
暢志が僕達とは違う種類の人間だったからだ。
活発的でない僕にはそれなりに、同じような仲間ができる。
そして、暢志には彼に合った友達がいただろう。
そんなちょっとした派閥の中で生きているものには、他の派閥に対する敵対心が生まれやすい。

知らないうちに、周りの奴らには僕や暢志は抱いていない警戒心が生まれてしまったのだろう。
だから、僕も暢志も元の仲間からは特殊として扱われるようになってしまった。
僕はそれが、人間の奥に眠る闘争心・保守的な本能という物なのだと理解している。

「巽はやっぱり茶色よりも黒だな」
店を出た歩道のフェンスに腰掛けながら言った。
「髪も眼鏡も暢志君と違って黒いしね・・・黒ほど君に似合わない色はないだろうね」
僕は嫌味に微笑を浮かべた。
すかさず暢志も僕に口を開く。
「逆にお前は黒しか似合わないじゃないか」
聴こえていないフリをして、僕は今買ったばかりのものを腕に巻きつけた。
ぎこちない手を、また暢志に馬鹿にされるかもしれない。
そう不安に想いながらかも、彼がそんなことをしないのは分かりきっている。
「なんか巽がアクセサリを身につけていると変な感じだな」
「ダテ眼鏡はそのうちに入らない？」
「え、お前ダテだったのか？！」
僕は黒ブチの眼鏡を外して暢志に渡した。
レンズの部分がプラスチックの、正真正銘のダテ眼鏡である。
僕はいつか彼に言ったつもりだったが、どうも彼は忘れてしまっていたらしい。
「初めて知った。でもいいんじゃん？似合ってるし」
返された眼鏡を受け取り、少し照れくさくなりながらそれをかけ直した。

元はといえば、こんな女子じみたことをしようと言い出したのは暢志だった。
僕があまりにも洒落っ気がないことが、よほど気に食わなかったらしい。
僕だってそれなりに年頃なのであって、興味がないことはないのだが、どうにも契機がなかった。
そんな僕を見かねた暢志は、なかば強引に何か僕に合うものを探そうと放課後の時間を分捕ったのだ。
僕はそれが嬉しかったし、暢志もこんな他愛もない時間を楽しんでいたように見える。

前を行き交う人は絶え間なく続く。
それは通り過ぎるたびに、僕と暢志の関係を気にするのだろう。
インテリに見える僕と、一般的に男子高校生をしている暢志と、その二人が一緒にいたら世間ではどう見られるのだろう。
僕が暢志の下についているようにでも見えるのだろうか。

僕は暢志とは全く逆の性質を持っている。
いつでも自信がない。
今こうして暢志と話している時間でさえ、自信を喪失していく。

「去年の今頃だったよな」
僕が呆然と行き交う人の足元を眺めていると、横で暢志が空を仰ぎ見ながら言った。
ロマンチストのようなその体勢に、思わず吹き出しそうになる。
それを見抜いたのか、暢志は僕の頭を軽く小突くと恥かしそうに視

線を落とした。
「何が、去年の今頃だって？」
暢志はポケットからシワシワになった煙草を取り出すと、そこから一本だけ口に咥えて火をつけた。
途端に煙が昇っていく。
「俺が巽に話しかけたのって、去年の今頃だよなって話」
あぁ、と頷くと、僕の頭の中にはその時の彼の様子が事細かに蘇る。
僕は決して一人で学校生活を営んでいたわけではないのだが、当時の彼には僕が『一匹狼』のように見えていたらしい。
昼食を屋上で食べていた僕に、彼が話しかけてきたのだ。
「何で俺はあんな勘違いをしていたんだろうな」
「僕が一匹狼だって？」
「まぁそれもあるけど・・・やっぱり今でも巽は一匹狼の素質があると思うし・・・」
どんな素質かは理解しかねるが、あえて彼の思うとおりに喋らせてやろうと口を挟むのを止めた。
しかし、暢志は少し戸惑ったように口をつぐんだ。
「何だよ。別に今更隠さなくたっていいのに」
彼の口から吐き出された煙が、夕焼けを含んだ空に舞い上がっていく。
その綺麗なコントラストに僕は少しだけ心を動かされた。
現実と非現実の交わる点が見えた気がした。
「まぁまぁ、お前とはこれからも長いだろうしな」
ニコニコと、暢志はいつもより無駄に笑っている気がした。
いつの間にか短くなった煙草を地面に叩きつけると、その火を薄汚れた革靴の裏で消す。
「俺が死ぬ時にでもなったら、教えてやるよ」
「なんだそれ！教えてもらう前に死んじゃったらどうすんだよ」
『死ぬ』という言葉があまりにも抽象的過ぎて、僕にはまだよく分からない。

冗談交じりに言った言葉にも大した意味なんかなかった。
ただ、僕は彼が死ぬ前にその答えを聞けるような気がしていたのだ。
それがどうしてなのか、自分にも良く分からない。

「さ、そろそろ帰るべ？」
「・・・もう？まだ夜にもなってないけど」
立ち上がって背伸びをする暢志の腕には、既に僕と同じ物が巻かれていた。
陽に透けて金色に光る髪と腕の茶色が同じように光る。
「だから、俺今日バイトなんだって。お前とは違ってバイトしないと金がないんです」
暢志はまるで子供のように顔をしわくちゃにして突き出した。
「そりゃどうも、羨ましがらせてしまってすみませんねぇ」
僕も負けじと精一杯の嫌味で返した。
確かに僕はバイトをしなくても暮らせるが、暢志と僕では行動の量が違う。
嬉しいような切ないような、妙な気持ちが僕の中を占領した。

いつものように、暢志は原付に乗ってバイト先まで走る。
いつでも彼と原付はセットとして考えられ、彼はそれに僕には到底覚えられないような長い名前をつけていた。
しかし彼はいるも略して『ルゼ』と呼んでいた。
「じゃあな眼鏡小僧」
原付にまたがった暢志が颯爽とヘルメットをかぶる。
僕はただ頷いて彼が走り去るのを見送った。

夕暮れが空を侵食し、暢志の吐いた煙のような雲がところどころに

散らばっていた。

失踪　【疾走】　2

「おはよう」
僕の隣で女子が笑いながら話しかける。
暢志と知り合ってから、僕の世界は広がった。
それまでは、天と地がひっくり返っても僕が女子に声をかけられることはないと思っていた。
しかし、そうしていたのも全て自分のせいであり、それを打ち壊してくれたのが紛れもない暢志だった。
自分だけで卑屈になって壁を作り、自意識の中に一人で生きていた。
それが僕だった。

「おはよう、今日はまだ暢志君来てないみたいだね」
僕が鞄を下ろしながら彼女に話しかけた。
彼女は一瞬、戸惑ったような表情を浮かべるとすぐに笑顔で肯定した。
暢志は、僕よりも先に学校に来ては仲間と輪を作って談笑している。
僕はいつもギリギリで登場するのでその話に加わることは珍しかった。
唯一覚えているのは、提出するはずだった現代文のノートを学校に忘れ朝早く来た時に加わったことくらいだ。
その時も、暢志はムードメーカー的存在を大いに奮っていた。
嫌な意味ではなく、むしろ暢志みたいな人間がいないと教室はあっけらかんとしてつまらないものになるだろう。

「まだ、来ないのかな・・・」
暢志に加えて、担任の先生すら来る気配がなかった。
隣の女子はどこか別の場所で話を始めている。
携帯を手に取り、暢志にメールを打とうとした時、先生が教室に入

ってきた。
急に教室の中は静まり返り、それぞれが席につく。
いつもなら先生が一喝しないと席に戻らない奴らが、なぜか今日だけは静かだった。
その中で僕だけが浮いている気がして、暢志がいないだけでこんなに僕の気分は左右されるのだと実感する。
僕も、もっと早く回りに目を向けていれば良かったんだ。

「えー・・・」
先生は、静寂な教室の中で何かを出し惜しんでいるように見えた。
咳払いだけをやたらして、本題には入らない。
出席をとるだけのはずなのに、どこかそれだけではない雰囲気が僕を包み込む。
みんなして僕を陥れようとでもいうのだろうか。
どうして僕だけ何も知らないのだろう。
知らないことを知らされるという恐怖と妙な好奇心だけが胸の内に膨らむ。
暢志にメールを打つのは、この話を聞いてからでも遅くないだろう。

「既に知っている奴もいるだろうが・・・」
やっとのことで先生が口火を切った。
隣の女子が僕を見ているのが視界の隅に映る。

「青柳暢志が」
頭の中に彼の後姿が浮かんだ。
自慢のルゼに飛び乗って、颯爽と風を切る様が鮮明に浮かぶ。
免許を取った日は、何回も喜びのメールを受け取った。

「昨日の夕方」

腕に巻かれている黒いアクセサリーに目をやる。
いや、目を向けたつもりだった。
彼の手首にも茶色の同じ物がある。
僕の頭の中で、昨日の綺麗な夕陽を背景にその二つを並び合わせた。
「バイト先に向う途中で、交通事故に巻き込まれ」
夕陽が、暢志の吐き出した煙草の煙に薄まってゆく。
送り出した背中に黒い影が落ち、次の瞬間何もない空間に放り出された。

「残念ながら、今朝亡くなったそうです」

隣の彼女と目を合わせる。
無意識の内に、右手首を掴んだ。
昨日買ったばかりの黒い・・・。

「巽、気を落とさないで」
彼女の口が静かに動いた。
何を、言っているのか分からない。
音が遮られ、視界は鮮やかな原色に彩られている。
みんな、これを知っていたのだ。
だからさっきから、いつもと違う雰囲気だったのだ。
「葬式は・・・」
先生がまだ何か話している。
僕は彼女の方向を向いたままで微動だにしなかった。
唐突に僕の中の意識が目覚め、頭で考えるよりも先に体が反応していた。

「おい、居城、どこへ行くんだ」
後ろで先生の声がする。その中に隣の彼女の声も混ざっていたかもしれない。
しかし、僕の足は勝手に歩き出して止まらなかった。
思考だけが完璧に遮断され、何も考えてはいけないような気さえする。
次第に駆け出し、学校の外へ出た。

息が、切れている。
普段運動をしない僕は少しのことで息が切れた。
しかし暢志は違う。彼は運動もできる人間だった。

校門まで歩くと、しゃがみこみ、携帯を見つめた。
暢志に送るためのメール作成画面が表示されている。

『暢志君、死んだって本当？僕の周りの人って何でそう簡単に嘘をつくんだろうね。
早く学校に来てよ。なんだか今日はひどく孤独感の強い日なんだ・・・。』

送信ボタンを押す。
紙飛行機が青空の向こうへ飛んでいく画像が表示され、メールが送信されたことを告げる。
気付かないうちに手が、震えていた。
メールは返ってくるだろう。

何言ってんだ巽、俺が死ぬわけないだろう。

頭の中に暢志の笑った顔が浮かび上がる。
空想の暢志が口を開き、彼の声で僕に話しかけていた。
少し安心して顔が緩む。
その瞬間、現実に引き戻されるかのように携帯が震えた。
恐る恐る、それでも俊敏に携帯を開きメールを確認する。

『巽君、ごめんなさい。暢志の母です。暢志がなくなったのは本当なのよ。
　まだ取り乱してて何も出来ないけど、うちに来てくれれば話ができると思うわ』

暢志君、君のお母さんまで僕を陥れようとしているみたいだ。
僕は疑いながらも、心の中できっとこれが真実だと分かっていた。
だからこそ、暢志の家に行かせてもらうと言う返事を出したのだろう。
自分の中に何人もの自分がいるようだった。
信じない自分、受け止める自分、何も分かろうとしない自分、どうしていいか分からない自分・・・。
校門の前でうずくまり、もしかしたら先生が追ってくるかもしれないという恐怖にすら怯えていた。
隣の彼女の悲しそうな顔が目に浮かび、あれにはどんな意味が込められていたのかと考えてしまう。
冷たくなった手を強く握り締め立ち上がると、一瞬だけ立ちくらみがした。
現実を確かめるために暢志の家へ向う。
足元が浮いているような心地がし、まるで自分が生きているのかさえ曖昧になっていた。

周囲に音や光はなく、ここに自分がいるんだと言い聞かせないといけなかった。
僕はここで歩いているのだと、改めて認識しないと小さな、ほんの小さな石にさえ転んでしまいそうだった。

暢志君、僕もルゼに乗ってみたいんだ。

失踪　【疾走】　3

頭がクラクラする。
後ろから灰皿で殴り殺された人は、きっとこんな最後だったのだろう。
目の前にあるものが不確かだ。
「これが、最後に暢志が身に付けていた物らしいの・・・」
並べられた遺品の中に、昨日買ったばかりの茶色いアクセサリーの姿もあった。
ところどころ赤黒く変色し、それが暢志の血なのだと思った。
思っただけでそれが真実だと受け止める勇気はまだ、ない。
「暢志君には会いましたか？」
僕は茶色の物を指で絡めながら言った。
母親は大粒の涙を床に落とすと、聞き取るのも困難なほど悲しみに打ちひしがれた声を出した。
「えぇ、亡くなった後だったけど・・・」
「・・・そうですか」
僕はいたって平静を保とうとしていた。
横で泣き崩れる母親を見たら、誰だって自分の感情を押し殺してしまうに違いない。
僕が泣いては、母親を困らせるだけだ。
暢志の父親は早くに蒸発し、暢志はこの母親と二人だけで暮らしていた。
僕もたまに家に上がることがあったから、意外と話し込んだりもしていた。

僕はまだ、暢志がもうこの世に居ないのだということを理解していない。

まだどこかにいるのではないだろうか。
洋服だけ残して、今頃素っ裸で潜伏しているんじゃないだろうか。
彼ならやりかねない。

「僕は、信じられません」
自分でも驚くほど、ツンと真っ直ぐな声が出た。
母親は不思議そうに僕を見上げ、赤い腫れた目を隠そうともしなかった。
スンと鼻をを鳴らすと、右目から一筋の涙が流れた。
「会ってきます、暢志君に」
母親の顔が強張り、それはやめなさいと止めが入る。
しかし、僕にもそれを突き通すべき理由があった。
「彼を見ないと、信じられません。
もし死んだと、青柳暢志が死んだというのなら、その事実を見なければいけません」
そう強く言って、僕はいつの間にか興奮してずれていた眼鏡をかけ直す。
額にはうっすらと汗がのぞいていた。
「・・・そうすることが巽君にとって一番だと言うのなら・・・」
母親は渋々病院を教えてくれ、相手にも連絡をとってくれた。
弱すぎる自分が迷惑をかけていることを、少し実感して申し訳なく思う。

「暢志に友達がいて良かった。あの子、そんなに友達多くないほうでしょう？
あの子に巽君みたいな良い友達がいて良かったわ」
「・・・暢志君に友達が少ない？逆ですよ。
暢志君はいつでも明るくて僕なんかよりは・・・」

母親は驚いたような表情をみせて、またしても涙を流した。
「暢志、小さい頃からそうなのよ・・・なかなか人を信じられないの。だから一般的に友達だといえる子も友達だと認めなかった。
　あの子、実はすごく淋しがりやでね、きっと巽君のことを友達だと言っていたんだわ」
なんだかよく理解できなかったが、少しだけ心が温かくなる。
同時に、母親の中では既に暢志が過去になっていることに気付いた。
僕の中では・・・まだだと思っていたかった。

「それじゃあ、僕は行きますね」
僕が会釈をすると、母親はフラフラと力ない足で立ち上がって玄関まで送ると言い出した。
弱々しい足で、精気を失った面持ちの女性にそんなことをさせられるわけがない。
僕は断り、何かあったらいつでも連絡を下さいと言い加えた。
そうして若干の緊張が芽生える中、玄関まで歩いてふと思い出す。
「あ、茶色の・・・」
僕は悪いな、と想いながらも母親の所まで戻り、昨日買ったアクセサリーについて話をした。
黙って耳をかしてくれるその姿が、まるで自分の肉親かのように思えた。
「いいわよ・・・持っていって。きっと巽君に持ってもらった方が喜ぶわ」
「ありがとうございます」
僕の中で気持ちは固まっていた。
もし彼がこの世にいないというのなら、この腕輪のあるべき場所はただひとつである。

病院までの道のりがやけに長く、重く感じられた。
僕を待っているのかいないのか、どちらにしても暢志はそこにいる。
緊張と不安とを混ぜ合わせた胸で、彼のことを考えていた。

失踪　【疾走】　4

ひんやりとした空気が、僕の体の外を覆っていた。
一歩歩くたびに床がコツンと無機質な音を奏でる。
前を行く男の人は、ひとつの引き出しのようなものの前に止まり、
僕を振り返った。
「大丈夫ですか？」
「・・・はい、お願いします」
親族以外にはあまり見せないそうだ。
それでも僕は見なければならない。
彼が死んだというのなら、彼にはそれなりの義務を背負ってもらう。
キィとロッカーのような引き出しのドアが開き、長い物が飛び出した。

心拍数が上がる。
暢志がそこにいたらどうしよう。
今更ながら、彼の死を直視する勇気が失われていく。
心の中では瞬時に激しい葛藤が繰り広げられていた。
さっきまで平常心を保っていたはずが、真実の扉が開いた瞬間、僕
の心は逆撫でされたように毛羽立った。
少しずつ現実となる真実に僕は立ち向かおうともせず、
彼と対面する頃にはただそれが仕方の無いことだと思うようになっ
ていた。

「・・・暢志、君」
そこには、彼の姿があった。
表情がまるで苦しいでもなく幸せでもなく、無表情であった。
こんな人間の表情を今までに見たことがあっただろうか。

仏を見て不気味だと言ってしまう理由が、今の僕になら分かる。
しかしそれを暢志に言うのは気が引けた。
白い布をかぶせられ、彼の頭部と肩だけが見えていた。
顔には多少の傷があり、頬に一つ、一文字の赤い線が入っていた。

「何、してんだよ」
僕は思わずひざまづき、彼の顔と同じ高さに視線をおいた。
震える手が勝手に彼を求める。
茶色の髪も、なにやら固まって汚れていた。
触れた髪の先が、まるで人形の髪のようにプラスチックで出来ているのかと思うほどだった。
「言ったじゃないか・・・」
僕の手はやがて彼の頬を、傷のついていない頬を撫でていた。
硬く冷たいその肌は、心の底まで人間だった過去を忘れてしまっているようだ。
明らかにあの時の暢志ではなった。
様々な彼の変化に驚きながらも、頭の中では冷静にそれを判断しようとしない。
まるで生きている人間を相手にしているかのように、僕の口は語りかけ続けていた。
「死ぬ前に、教えてくれるって・・・言ったじゃないか」
もう動かない彼の顔、温まらない皮膚、傷が物語る事故の様子。

僕の目から涙が落ちた。
それが彼の閉じたまぶたに当たって散乱する。
彼に対する初めての涙だった。
静かな彼を目の前にして、頭の中ではまだ動き回る暢志が生きていた。
初めて会った日の記憶から、昨日の煙草を支える指まで、細かい映

像が走馬灯のように上映される。
頭に描かれた映像を吐き出すかのように、僕の目からは涙が溢れた。
頭では、彼がもう帰らないことを理解していた。
何よりも、誰よりもよく分かっていた。
それでも僕は彼を見るまで信じられなかった。
そして今こうして目の前にしてもなお、信じられない。
不気味な表情も、固まった髪の毛ですら演技に見えてしまう。
そういえば、暢志は授業をサボる時の演技がうまかった。
僕の不器用な部分をいつもカバーし・・・。
「すみません、そろそろいいですか・・・？」
部屋の奥に居た男の人が僕に声をかける。
ふと我に返ると、いつの間にか僕が眼鏡を外して暢志の白い布を濡らしていた。
時間がどれほど経ったのかも分からず、僕は制服の裾で涙を拭って立ち上がった。

――お前はすぐ自分を見失うんだな。
君に言われたくないよ。
――俺はいいんだよ。そういう人間だ。
そういえば、昨日のコレ落としたでしょう。大事にしてよ。
――あぁ悪い悪い。ちゃんと持っていくよ。
ねぇ僕に似合うかなぁ。

「すみません、行きましょうか」
僕は男の人にそう言って、彼の眠る引き出しを閉めてもらった。
鍵が閉まり、彼の永遠は現実と隔離される。
冷たさという形で吸収した彼の温もりを、僕は現実を見つめるために握り締める。
現実は遠かった。
彼との永遠の別れを強いられた現実は、僕に厳しいものだった。

茶色の腕輪を握り締め、黒い腕輪に別れを告げる。
僕に似合うと言った黒は、これからは彼の腕に巻かれる。
変わりに彼の茶色は、いつまでも僕のそばにあるだろう。
僕の最初で最後の我が侭で、彼に対する最初で最後の存在証明だ。

きっと、暢志は僕の友達だった。
友達であり、それ以上の大きな存在でもあった。

病院を出てから家までの道、僕の頭の中には彼しか浮かんでこなかった。
日常を過ごすのにあたって、暢志の存在はあまり大部分を占めていないと思う。
それは紛れもない嘘であり、過去の満たされていた自分の幸せボケなのだ。
明日からの生活に、暢志はもういない。
彼の煙草の煙の面倒を見なくて済むのかと思うと清々した。
そう、僕は彼にうんざりしていたのだ。

「・・・ちょっと、お兄ちゃん大丈夫？」

近くのスーパーの買い物袋がチラチラと揺れている。
その持ち主の声が遠く、遥か遠くで鳴っているのが分かる。
視界は白く濁って、徐々に見えなくなっていった。

顔をくしゃくしゃに歪ませて、声を押し殺して、とめどなく溢れる涙が口に入っていく。
腕で必死に顔を覆い、僕は道端でうずくまっていつまでも泣いていた。

翻弄　【奔走】　1

僕には、三歳年下の弟がいる。
「兄ちゃん、最近家にいてばっかだな」
彼は生まれつき心臓が弱く、幸いなことに幼少の頃には回復していた。
しかし最近になったまた悪化し、病院にいく以外は外に出られない生活が続いている。
「そういう連も家にいるじゃないか。早く治せよ」
「そんなこと言われても・・・自分で治せるんだったらとっくに治してるよ」
母親が作りおいた昼食を二人で食べながら、久しぶりの会話を交わした。
暢志がいなくなってから、一週間が経過していた。
僕は、あの病院から帰って来てから一度も外に出ていない。
世界の全ての物は、みんななくなるのだと分かった。
今こうして自分がここにいることですら曖昧で、過度の不安がつきまとった。

連が家にいるようになったのは一ヶ月ほど前だろうか。
だとしたら、僕の一週間なんて痛くも痒くもないのかもしれない。
この一週間にも連と話をしなかったのは、僕が自室で一人うずくまっていたせいである。
「兄ちゃん、何かあった？」
暢志が消えたことは、母親にも、もちろん連にも言っていない。
言葉にして認めるだけで、暢志自身だけじゃなく彼の記憶も消えてしまいそうだった。

「いや、別に何も・・・」
僕はピラフの乗ったスプーンを皿に戻し、連を見ないように眼鏡をかけ直した。
口の中で小さなエビを更に細かく砕く。
「・・・何かあったんだろ。すぐ分かるよ」
連は口の中いっぱいにピラフを詰め込んで言った。
驚いて直視したその顔は妙に嬉しそうに歪み、まるで僕を嘲る様だった。
「兄ちゃんが嘘つく時って、人の目を見ないからすぐ分かるんだよ」
「よく見てるなぁ・・・」
僕は照れくさそうに笑いながら、ひたすらコップに入ったジュースを飲み干した。
今度は連を直視することが出来ない。
見透かされていた僕の嘘のつき方を中心に、全てを知られているような気がしてならなかったのだ。

僕は、連が嘘をつく瞬間を見逃さずに見抜くことが出来るだろうか。
否、僕には出来ない。

「で、どうしたの？母さんも心配してたよ」
「母さんには・・・言わないって約束するなら」
母親ももちろん、連も多かれ少なかれ暢志のことを知っているだろう。
僕が何度か食卓で彼の話題を出したことがあるからだ。
僕にとって、彼は新しい種類の人間であり、珍しくもあった。
彼と一緒にいる毎日がとても新鮮で・・・。
途端、思い出が乱雑に揺さぶられる。
まるで放送時間を終えたテレビのように白黒の砂嵐が頭の中を埋め尽くした。
思い出してはいけない。

思い出す、そんな行動で彼を葬ってはいけないのだ。
「・・・言わないよ。何？そんなにヤバイことなの？」
「ヤバイっていう訳じゃないけど・・・何かと面倒だからさ」
母親に知れたら、きっと彼女は暢志の家に行くだろう。
そして暢志の母に嬉しくもない余計な世話を焼くに決まっている。
もしそれが社会の中のルールだとしても、今は彼女に余計な気遣いをして欲しくなかった。
暢志の亡くなったあの家は、きっと冷たい空気に満ちているだろう。
連の顔は好奇心に溢れていた。何か楽しいことを求めている。
しかし、今の僕には楽しいことなんか一つもない。
つまらないこの家と病院とを行き来している連には面白く、刺激のある話が必要なのだろう。
作り話でも構わない。彼の探究心をくすぐるものなら何でも構わない。

気付けば、僕は嘘をついていた。
それはいつの間にか、自然と口から出たもので悪気はない。
結果として彼も喜んでいるのだから僕に非はないはずだ。

ちゃんと、彼の目を見て話せただろうか。
嘘とはバレていないだろうか。
笑った口元に余計な不安は残していないだろうか。

僕の嘘を見破れる連にも、僕の学校生活のことまでは分からないようだった。
一週間も家に閉じこもる理由を、僕は学校で乱闘騒ぎを起こしたからだと偽った。
もちろん、そんな騒ぎが実際にあったわけではない。

あったとしたら、既に家に連絡され僕はこんなところでのうのうとピラフをほうばっているはずがない。
連にそういった知識がないことも、僕にとっては好都合であった。
「それで？その人大丈夫だった？」
連は僕が殴ったという人物を心配するような素振りを見せるが、どうしてもその裏にある好奇心だけは隠し切れないようだった。
チラチラと見え隠れするその心に、弟がまだ純粋なことを知る。
弟といってももう中学二年生だ。
今繰り広げた空想の中の僕のように、いわゆる不良になっていてもおかしくはない。
病気のこともあるのだろうが、僕のように生真面目に見られる人間にはなって欲しくなかった。
勉強だけ出来て、友達をえり好みするような連中の仲間に、なって欲しくない。
それを変えてくれた暢志のような親友に巡り会えばいい。

「兄ちゃん？どうした？」
「あぁ、ごめん、考え事しちゃってた」
連はゆっくりとその大きな口を三日月の形にして、穏やかな表情を見せた。
僕はピラフの最後の一口を飲み込むとその顔を見つめた。
「兄ちゃんと話したの、久しぶりだ」
その口は言葉を放つとまた三日月に戻る。
まるで起き上がり小法師のようで、連の小さい頃の記憶がふと映像となって頭に浮かんだ。
ところどころ曖昧で、ピントがずれたかのようにぼやけている映像。
それでも懐かしさは胸の奥の小さな取っ掛かりに引っかかった。
「そうだな、久しぶりだな」
僕の胸の中に様々な感情が蘇る。
幼かった頃を回顧するのは、その時の幸せをもう一度味わうような

ものだ。
しかし現実に帰って来た時、過去と現在のギャップに悩まされる。
幸せでありたいと願い過去を振り返ろうとしている自分と、
現在にとどまって今を変えなければいけないとする自分が狭い頭の中で戦っていた。

「兄ちゃん」
「・・・何？」
連が今までの三日月を更に半月ほどに開いて、悲しそうな嬉しそうな声で呟く。

本当のことを話せよ、　と。

完全に僕の負けだった。
今の連を、僕は過去の自分だと思っていたのかもしれない。
だからこそ、井の中の蛙、知った振りになっていた。
「顔が真剣だよ」
連が言う。
その通りだった。
さっきから複雑な気持ちになっていて、余裕を見せた記憶がない。
作り話を連に聞かせる時も、昔話を思い出していた時も、僕の意識は一つもそこになかった。
だからといって、連を放っておいたわけじゃない。
「話せばすっきりするかもしれないじゃないか」
まさか連に諭されるとは思ってもいなかった。

しかし、僕は怖かった。
今まで生きてきた中で、これほど深い感情があっただろうか。
人に話すのも、そしてそれを現実の中に吐き出して事実にしてしまうことも怖かったのだ。

恐る恐る開いた口が、真実を吐き出していく。
かすかに手元が震えていた。
僕の中にしかなかった気持ちが現実となる。

何より、誰よりも死の近くにいたであろう連に話をするのが、

一番怖かった。

翻弄　【奔走】　2

暗くなり始めた部屋に、母が帰ってくる。
「あらどうしたの、そんなに盛り上がって」
母が電気くらい付けなさい、と呟きながら蛍光灯に手を伸ばした。
途端、部屋中は明るく照らされ、僕の目はその衝撃で得体の知れないものを視野に浮かべる。
僕と連の会話は一時中断を余儀なくされ、当たり障りのない会話だけがその場に残っていた。
連は僕の行動だけでなく、心理まで読み取っていたのだろうか。
そう思わせるほど、彼に話すことで不安は拭えた。
いや、拭え切れてはいないかもしれない。
しかし、いつの間にか暢志が死んだ話から彼の思い出話へと話題が移っていたのだ。
そう、『思い出』話へと。僕が最も嫌だった『思い出』話。
連はそれを楽しいものに変える話術を持っていた。
彼自身が自覚をしていなくても、それは確かに彼の能力だった。
場を和ませながら僕の望む所を叶えてくれる。
僕は誰かと、暢志の話をしたかったのだ。
暢志を忘れたくないと思う一方で、彼を過去のものにしたくないという願望があった。
忘れないためには思い出すことをためらってはいけない。
しかし、過去のものにしてしまう訳にもいかない。
それを把握してかしないでか、連は僕にその話をさせることが出来た。

「母さんには・・・」
僕が連に小声で話しかける。
すると、彼は少しだけ茶目っぽい表情をして、分かってる、と答え

るとすぐに母親の元へ駆け寄った。
買い物袋から食材やら生活用品を取り出す母の横に立って、その袋から何が出てくるのかを確かめているようだ。
そこにはまだ純粋無垢な弟の姿があり、なぜか心の底から安心する。
連が、弟として僕を理解しているのは確かなのだろう。
そして、他人を思いやり、和ませる能力を持っているのも紛れのない事実なのだ。
しかし連はそれに気付いていない。故意にしていることではないのだ。
その事実が僕を安堵させてくれる。
連はまだ、可能性に満ちている。

僕は仲の良い二人を尻目に自室に戻った。
僕の家は幸運にも一軒家で、自室はその二階にある。
夏は日差しが当たって暑く、冬は暖かさのかけらもない。
地冷えしないからいいものの、大抵の人間は一階にいるので温もりがなくなってしまうのが難点だ。
扉を開けると、自分だけの空間が広がる。
整っているとは言えない、もはや散らかっている部屋だが自分にとっては一番居心地の良い場所だった。
電気をつけるとベッドに寝転がり、天井にあるしみを見つめる。

僕は小学一年生の頃からこの家に住んでいる。
それは同時に、僕が小学一年生のときにこの家が建設されたとも言える。
当時からこの部屋を僕の部屋として与えられていた。
あの頃はよく連とゲームやら何やらをして遊んでいた。暇さえあれば、一緒になって遊んでいた。
あのしみは確か、ボールをぶつけてできたものだった。

粘着性のあるゴムボールで、壁などに投げつけるとゆっくりと落ちてくる、という遊び道具だった。
それを、連が天井に向って投げつけたのだ。
しかしボールはなかなか落ちてこず、ちょうどベッドの上だったために僕はどうして寝たらいいのだろうと危惧していたのを覚えている。
そう思ったのも束の間、ボールは鈍い音を立てて連の前に落下した。
一部を天井に忘れたボールが。
それ以来、僕は寝るたびにそれを見つめることになってしまった。
今はもう薄くなってしまったしみだが、思い出だけは色艶やかに蘇る。

「兄ちゃん」
いつの間にか眠ってしまっていたらしくドアの向こうから連が僕に呼びかけているのがまぶたの隙間から垣間見えた。
目を擦りながら上半身を置き上げると連は静かに部屋に入ってくる。
「寝てた？」
「うん・・・最近はよく寝ちゃうんだ」
「さっきの話なんだけど・・・その、暢志さんの」
連は僕と目を合わせようともせずにベッドの空いている空間に腰を下ろした。
きしむはずのベッドが、あまりきしまずに連の体の軽さを物語っている。
同じ年の子と比べればその差は一目瞭然に違いない。
「あんまり内にこもりすぎるのも、良くないと思うんだ」
寝ぼけ眼で連を見つめていると、ようやく視界が晴れてきた。

意識もしっかりと現実を認識し始め、連が何を言わんとしているのかが推測できた。
「少しくらい、思い出してあげても良いんじゃないかな。
俺だったら・・・もし死んでも思い出していて欲しいと思うから」
なぜかその言葉が胸の奥を鋭く衝き抜いた。
衝撃なのか眠気なのか、得体の知れない物体が僕の頭を支配して口を開かせなかった。
何も、言えない。
何も声をかけることが出来ない。

『俺　ガ　死ンダラ　・・・』

リアルに浮かんでしまったその情景が僕を責め立てる。
僕は何と言うことを考えてしまったのだろう。
「兄ちゃん？」
「あ、ごめん、まだ寝ぼけてるんだ・・・。
そうだな、でも連の言うとおりだと思うよ。しっかりしないとな」
僕は心にもない言葉を吐き出しながら、内心焦っていた。
思い出せるはずがない。僕は思い出す術を持っていないのだから。
今の僕は、連がいて初めて彼を思い出すことが出来るのだから。
しかし連の言うことは最もである。
僕だって抹消されるより、思い出としてずっと世界にとどまっていたいと思う。
「うん、そういうこと。俺のこともちゃんと思い出してくれい」
「何言ってんだよ」
真顔で連に向き合う。
しかし彼は、寂しさを内に秘めた笑顔で僕を見つめていた。
恥かしそうに、少しだけ淋しそうに頭を掻くとゆっくりと立ち上がって部屋を出て行った。
嫌な予感とそれを感じてしまう自分に嫌気がさす。

何を考えているのだろうか、僕は何ということを想像しているのだろうか。
ベッドの上に残された僕は一人、途方に暮れる。
ベッドの上にくぼんだ小さな跡が連の重さだった。
それをみつめながら、必死に思いを別の方向へ向ける。
死、という絶対的な運命から逃れるわけには行かない。
しかし、彼にその絶対を強制するというのなら僕が変わりになってもいいとさえ思う。

フとまた暢志を失った悲しみを思い出す。
連が癒してくれたはずの思い出をまた持ち返す。
いずれ誰もいなくなるのは事実なのだ。
遅かれ早かれみんな死を享受しなければならない。
その順番は、自分が一番初めであって欲しい。
自分が初めであれば、何も悲しみに暮れることはない。
連の重みが少しずつ直っていくのを見届けながら、僕はまた眠りについていた。

夢の中では何もかも真っ白だ。
綺麗な風景も美味しい料理も全てが満たされない物と化す。
夢が望んだ世界であっても、それが幻想だと気付いてしまっているから夢の中でも明日を思う。
僕は案外、クールな人間なのかもしれない。
だからこそ、暢志にも『一匹狼』だなんて言われたに違いない。
悲しいことだ、夢の中で自分を嘲笑する。

だだっ広い荒野の中で僕は、一人彷徨うようにして歩いていた。
誰もいない、それを知りながらも僕は誰かを探している。
右手に白黒の花束を掴み、左手にはゆらゆらと揺れる炎をぶら下げている。
視界の片隅に入るのは茶色い、皮製のブレスレットだった。
何よりも強い色を放ちながらそれは存在感を放出している。
僕はいつの間にか、大きな石の前に立ちすくんでいた。
刻まれた文字を読んではいけないような気がして顔を背ける。
しかし僕の目は確かにその文字を追って頭の中へと叩き込む。

刻まれた文字、それは僕を暗闇よりもひどい場所へ突き落とすものだった。

ビクンと体が反応してベッドがきしんだ。
驚いて起き上がり、辺りを見回す。
何も代わりはない。
何ひとつとして変哲のない自室が自分を囲んでいる。
何か変わっていれば満足だったのだろうか。
この現実へと引き返して来なければ、僕はそれで満足だったのかもしれない。
悪夢を、また思い出す。
石碑に刻まれた、思い出したくもない名前が頭を埋め尽くす。
嫌な予感というよりも、それは既に僕の病気みたいなものになっているようだった。

ベッドから下りると、腹が急に大きな声をあげる。
そういえば、夕食も食べていない。眠ってばかりだ。

そのせいで体の後ろ半分が関節痛のような痛みを放っている。
背中は長時間座り続けた後のような居心地の悪さが残り、頭は二日酔いの半分くらいの割合で痛みを含んでいる。
朝の八時。
両親は既に起きているはずである。
父親の方は、もう家を出ているかもしれない。
朝食が用意されていることを期待しながら階下に下りる。

うちの階段は幅が狭かった。
昇り慣れない階段だとよく違和感を覚えることがあるが、僕は毎日その違和感を覚えながら上り下りしている。
今日は更にその違和感が強かった。
いつもと何かが違うと疑心しながら、頭の中で食欲だけが想像に花を咲かせている。
リビングに着いた時点で、ようやく何がこんなに違和感を感じさせているのかが分かった。
異様なまでの静けさだった。

朝といえば、誰かしら食卓についてテレビやらご飯をかっ食らっているはずである。
しかし今朝に限って台所にも洗面所にも人のいる気配は全く感じられない。

悲しいまでの孤独感と緊張感に、追い風のごとく電話が鳴り響く。
出たくないと思うと同時に、早く出なければいけないという矛盾の気持ちが生まれていた。

翻弄　【奔走】　3

「・・・もしもし」
僕は寝起きのせいか、低い声で対応していた。
受話器の向こう側ではザワザワとした雰囲気が窺える。
荒く息の上がった声がした。
「やっと出たわ」
母親の声だった。
途端、僕はその場から、いや、全世界のどこからも逃げ出したくなった。
頭を響く頭痛が更に輪をかけて酷くなる。
何も聞きたくはなかった。
「早く病院まで来てちょうだい」
僕の口から、いくつかの声が出る。
それは言葉になることもなく、空中に消えていった。
聞いているの、という問いかけが受話器を当てた耳から逆の耳へと通過する。
本当に音って言うものは、スラスラと脳内を通過するもんなんだな・・・。

「病院で何があったんだ？」
僕は落ち着き払ったような口ぶりで言う。
分かっている、何もかも。
こうなることを僕は知っていた。
虫の知らせのように、僕の一番人間的な部分だけがこの展開を、結末を知っていたのだ。
それに気付かない振りをしていたのは、この僕自身だ。
だからこそ、母親の返答さえも予測できていた。
真実を認めるのが、ただ怖かった。

「連が急の発作で・・・今はまだどうなるか分からないの・・・」

「あぁ良かった」

僕は無意識に胸を撫で下ろし、呟いていた。
母親が怪訝そうに聞き返すが一蹴して今すぐ行くとだけ答えて電話を切った。
良かった、まだ連は生きている。
悪い展開のはずなのに、なぜかまだ連に命があるということを大きな喜びのように感じられた。
それだけが、今の僕にとっての大きな救いだった。

階段を駆け上がり、最後にいつ着たか分からないような洋服を引っ張り出して着替える。
腹が空いていたことなど、とうの昔に忘れてしまっていた。
なかなかうまく入らない片腕に苛立ちを覚える。
焦りすぎると逆に遅くなると知っているはずなのに、なぜか僕は上の空でただ感情に身を委ねていた。
体が勝手に着替えをしている、体が勝手に財布を掴む。
その間僕の頭の中では、考えないようにしていたことがグルグルと巡っていた。

―――僕の暢志への最後の言葉は、何だったのだろうか。

家を飛び出すや否や、僕は随分使っていない自分の自転車をまたいだ。
考え事をしている片隅で、病院の到着時間を計算する。
自転車で駅まで十分。駅から病院まで三駅、合わせて三十分もあれ

ば着くだろう。

―――アイツに抱いたような、後悔をしないように。

自転車をこぎ始めると、気持ちの良いはずの風が向かい風のように感られた。
今は、これを乗り越えて誰よりも先を走らなければいけない。
じわじわと滲む汗を向かい風で乾かし、僕の自転車はこれまでにない走りを見せた。

悪いと思いながらも、自転車を違法駐車として道端に止める。
しかし、なかなか自転車の足が下りずに僕の苛立ちは頂点に届きそうだった。
駐輪場にとめれば罪悪感も、自転車が撤去されてしまうという不安もないのだが、そんな時間は与えられていない。
何が何でも急がなければいけないのだ。
この気持ちが自分自身を焦らせているということは分かっている。
ポケットに入った携帯が長いバイブ音と共に振動する。
自転車をやっとのことで止め、早足で歩きながら電話に出た。
先ほどと同じ、背景にざわめきを含む場所からの電話。

「もしもし、巽・・・」
母親の悲しそうな声が耳に届く。
今の僕にはその声さえも邪魔者であった。
これから地下鉄に乗るというのに、通話したままでは入れない。
もう駅はすぐそこに迫っている。
用件だけ聞き出して、早く構内に入らなければ・・・。

「巽、連が・・・」

足は地下に降りようとしていた。
通話が途切れ途切れになると、通信の切れた音が耳元で鳴り響く。
人工的で感情のこもらない、電話をするに当たって最も好都合な音だろう。
相手は人間だとしても介するものは人間ではない。

———僕はもう、人間でいたくない。

途切れる前の最後の一言、連が息を引き取ったという、母親の報告。

感傷　【完走】

電車はまだ通勤ラッシュを抱えていた。
僕は切符を改札に通すと、混んでいる方向とは逆のホームへ下りる。
病院に向うのは通勤ラッシュとは逆方向だ。
いつもの倍以上にそのことが嬉しく思えた。

僕はこれから本当に病院へ行くのだろうか。
果たして何をしに行くのだろう。
ただ体温を失って行く弟を見届けろとでも言うのだろうか。

電車がホームへ滑り込み、その突風に思わず身がよろける。
いっそのこと、そのまま線路に倒れてしまいたくなった。
扉が開くと、慌てて起きたのだろうか、深く帽子をかぶった中年男性が急いで降りてきた。
彼は僕にぶつかると、会釈をして非礼の言葉を乱雑な口ぶりで吐いた。
あぁ、きっと暢志なら怒り出すんだろう。
しかし慌てていた割に非礼を詫びたのだから、おそらく根は真面目に違いない。
混沌としきった頭の中で、やけに思考だけが無駄なところへ働く自分が可笑しかった。

車内に入り、さっきまであの男が座っていたであろう場所に目をやる。
そこには大きな紙袋が置かれていた。
彼の忘れ物だろうと、扉の向こうを見やるが彼の姿は既に消え去っ

ており、そのままにしておいた。
どうせ僕が偽善ぶって届けたところで何も返ってはこない。
その近くに座るのも何か心苦しさがあり、僕はそこから少し離れたシートに力なく腰を下ろした。

電車が動き始めると、つられて中吊り広告も一緒に傾く。
車内に人は少なく、二人分のシートを一人で使える程度の乗車数だった。
「お乗りの快速電車、次は・・・」
しまった、と思った。
乗るべきなのは快速ではない。
病院に行くには各駅停車でないとならなかった。
というのも、その病院があまり大きくないせいである。
誰にこの悔しさを訴えれば良いのか分からず、僕はただひたすらに唇を噛み締めた。
痛くなって唇を離した時、かすかに嫌な空気が肺へと流れ込んだ。
顔を上げて見渡すと、注意すれば気付く程度に空気が淀んでいる。
まるでライブハウスの煙草の煙と演出の煙が混ざったような感じだった。
前に座っていた男性が顔をしかめる。
その隣に座った大きなマスクをした女性も異変に気付いたのか、辺りを見回した。
僕はいち早く、きっと誰よりも早くその元を見つけ出していた。

原因は、ぶつかった男の忘れ物に違いない。
そこから煙は流れ出、化学的な匂いを発している。
「ちょっと、これ危ないんじゃないですか」
どこかの女性が言った。
それと同時に紙袋に対面するように座っていた女子高生が体を二つに折って前のめりに倒れこんだ。

辺りにどこからか女性の悲鳴が響く。
それは強烈なものとなり、車内を揺るがす。
それを皮切りに、車内は騒然とした雰囲気に包まれた。
僕はただ、その光景を眺めていた。
ここには人間が人間のままで生きている。
僕はどうなるのだろう、そんな疑問は最初の僅かな時間で塵となって消えた。
車内を走る人々、うずくまり、動かなくなっていく人。
何のためにこんな仕業をしたのか分からないが、彼はここにいる人よりはましだった。
礼儀を持っていた。
人間として与えられた任務をこなしていた。

「坊主、どけ！」
前にいたはずの男性が、いつの間にか僕の上にいた。
瞬間的に弾き飛ばされ、窓の淵に頭を打ったが、痛みなど最早感じなかった。
電車のシートに倒れこんだまま、僕は彼を見つめる。
面白いくらいに歪んだ表情がこの事態の深刻さを物語っていた。
窓を懸命に叩く姿は、いつか動物園で見たゴリラの野生的な姿に似ている。
「割れないよ。第一、もうどうにもなるはずないじゃないか」
彼の腕時計のせいでこめかみが薄く切れ、血液が頬を伝って口の中に入った。
男性が窓から離れ、立ち上がった。
それと同時に僕の居場所も元に戻り、頭を抑えながら座りなおす。
男はその僕の行動を睨むようにして見ていた。

右手の甲で血を拭うと、男と同じようにして睨み返す。
「静かにしてた方がいいよ、最後くらい」
冷たく睨んだ僕の目を覗き込んで、彼は目の色を変えた。
まるで、野生。
ざわついた車内を一振させるほど、一時静寂を招くほどの大きな雄叫びを上げると、
男は千鳥足で電車後方へと歩いていった。
つり革にぶつかりながら歩くそのさまは、確かに野生と化した人間の未来像に違いない。

この状況でも、案外僕は楽しんでいた。
自分に必要不可欠だった存在を失い、更に今自分までをも失おうとしている。
死という最終段階を目の前にすると、人間は本能をぶつけようとする。
そこにはきっと、理性では計り知れない何かが存在しているのだ。
嘘と偽りの正義で塗り固められた世界、その中にも真実はこうして存在している。

一人だけ、僕と同じようにただ座り込み、ひたすらにその時を待つ姿があった。
僕のななめ前に座っていた、大きなマスクの女性である。
彼女はマスクを外しながらゆっくりと僕に微笑むと、そのまま右に崩れるようにして倒れた。

最後の笑みは、僕の心に大きく開いた穴を埋めるようにして全身に

広がっていった。

表情　【表彰】

テレビの中に惨劇が映る。
その中に、僕の姿もあった。

「もう見ないほうがいいわよ」
母親がテレビの電源を消す。
そして僕の前に座ると笑みのような、悲しみのような表情を見せてタメ息をついた。
「巽がここにいるのは、連のおかげなのかもしれないわね」
頭の中に、あのときに見た女性の微笑を思い出す。
全てを受け入れたような笑顔だった。
ああいうのを、天使と呼ぶべきではないだろうか。

僕は生きることを選んでしまった。
現実らしい現実をこの目に焼き付けるために、生きることを選んだ。

横にある新聞にも僕の顔が載っている。
彼女の笑顔によって勇気付けられた誇らしげな二つの目がある。
大きなマスクで口元は隠れているが、そこにはきっと彼女と同じ笑みがあると信じている。

あの時の、彼女の手の暖かさを僕は一生忘れないだろう。

結局僕も、絶望しかないと思っていた中に、生への執着をしっかり握り締めていたのだ。

＊　＊

「あなたは生きたほうがいいわね」

駆け寄った僕に、彼女は言った。

殺伐とした車内で、彼女の声だけがすんなりと耳に入る。

手に持った白いマスクを彼女はゆっくりと僕の手の中に押し込んだ。

最後に微笑んだ彼女の顔は、いつまでも僕の頭に焼き付いていた。

＊　＊

僕は

連の言葉と

暢志の茶色いブレスレット、

そして彼女の笑顔という生きる糧を胸に真実を探し続けるだろう。

失った悲しみと共に、生まれる暖かいモノもあると知ることが出来たから。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2873i/

全力疾走

2010年12月23日02時27分発行